

# アジア・アフリカ・ラテンアメリカ 京都版 No.121

Asia-Africa-Latin America(AALA) 2014年12月1日

## 京都府アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会

連絡先 〒606-8242 京都市左京区田中高原町9-3 澤居紀充方 電話/Fax 075-722-3134  
[sawai@silver.plala.or.jp](mailto:sawai@silver.plala.or.jp) 年会費(6,600円)は郵便振替 00970-4-223429 京都府 AALA 連帯委員会へ  
ホームページ新版 <http://kyoto-aala.com/> (旧版へのリンクあります)

日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会全国縦断学習講演会(近畿)

## \*パレスチナ・イスラエル問題の

## ルーツと真実—中東の平和実現をめざして—

講師：ワリード・アリ・シアム氏

駐日パレスチナ常駐代表部(大使館)大使

## \*南米革命の現状と平和の共同体

講師：田中靖宏氏

日本 AALA 常任理事、元「赤旗」外信部長

**第二部** 2人の講師を囲む懇談会午後5時20分～ 参加者30名限定

(受付でお申し込みください) 参加費は別途650円(コーヒー&ケーキ)

とき:12月7日(日)午後1時30分～

ところ:京都鴨沂(おおき)会館新館ホール

京都市上京区荒神口寺町東入ル荒神町 電話:075-231-1001

参加費:1000円

(交通)市バス3、4、17、205系統、河原町通り「荒神口」下車、西入る、1分  
京阪「神宮丸太町」駅から徒歩10分



世界は激しく変化しています。  
平和と非同盟の流れはますます大きく…。

この変化をしっかりとらえるための学習会を企画しました。

主催:日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会  
(日本 AALA) 近畿ブロック

連絡先: 京都 AALA(京都市左京区田中高原町9-3 澤居方 電話/FAX - 075 - 722 - 3134)

# 渴いて死ぬ川

ムハンマド・ダルウィッシュ  
訳 西山正一郎

ここに川がありました。  
川の兩岸に土手がありました。  
天にいます女神さまが雲から恵の滴をお降らせになり  
ゆったり流れる小さな川を造られました。  
川は山頂から流れ下り  
すてきで元気なお客さまのように村むらやテントを訪ない  
夾竹桃とナツメヤシを村にもたらし  
土手の上で夜通し浮かれている人たちに微笑みかけました。  
「雲のミルクを飲み  
そして馬に水を与え  
そしてエルサレムとダマスカスへ飛べ」  
川はときどき勇ましく  
またあるときは情熱のままに歌ったのです。  
兩岸に土手がある川でした。  
天にいます女神さまが雲から恵の滴をお降らせになりました。  
ところが悪い奴らが女神さまをかどわかしたから  
川の水がたりなくなり  
ゆっくりと、渴いて川は死にました。

\*ムハンマド・ダルウィッシュ（1942～2008）：パレスチナの国民詩人。  
彼は、詩人というだけでなく全ての文化プロジェクトを伝えるメッセンジャーであり、  
同時に、パレスチ人のアイデンティティーの保護者であったと言われている。

## 幸いなる祖国 イエメン 歴史と文化

吉田日本語学習友の会催し案内 「世界からの手紙」

- ◇2014年12月20日（土）午後3時～5時 会費：300円（イエメンのお菓子とお茶）
- ◇京都大学セミナーハウス 正門を入れてすぐ左（西）へ、赤レンガの建物に挟まれた木造平屋建
- ◇お話とビデオ：イエメンの大学院生（京大薬学研究科） 講師手作りのイエメンのお菓子とお茶で懇親タイムがあります。イエメンの女性の服装紹介も。
- ◇終了後近くのインドカレー店で歓談
- \*吉田日本語学習友の会は外国人留学生の日本語学習を援助するボランティア団体です。  
1992年創設。詳細は同会ホームページ参照。

## 安部政権とメディア

考える事いくつか

須田 稔

▼『毎日新聞』の特別編集委員・岸井成格氏は、ジャーナリストの桜井よし子氏から月刊『文芸春秋』誌上で五回も名指しされて「偏向報道」を批判されたと、語っている。萎縮するような人ではないと信じるが、右派論客はこのところ「狂気」乱舞している。安倍の傘に入っていると良識は摩滅するのだろう。

大臣や国会議員が特定のマスメディアやジャーナリストに名指しで罵詈雑言を浴びせるなどは許されないとと思うのだが、礼節知らずの「ならず者」が少なくない政権だ。山宣・多喜二・滝川教授・横浜事件と数え切れないほど言論弾圧があった国なのだし、敏速に反撃しなければならぬ。安倍は、戦前戦中の大日本帝国を「取り戻そう」と公言しているのだから。

▼政権に批判的な新聞は、全国紙だと『朝日』『毎日』『東京』とされているが、『朝日』が政権支持勢力にバッシングの口実を与えたところがあったにせよ、萎縮せずに革新・進歩の立場に踏みとどまって健闘してほしいと思うのだ。

▼池田勇人内閣の秘書官、佐藤内閣の秘書官から岸井氏は同じ事を聞かされたというのだが、「政権を維持する三種の神器」は、1にアメリカ、2に財界、3に闇の力、つまり右翼・ヤクザというのだ。ネトウヨや排外主義・国粹主義やネオナチ団体が蠢動・台頭しているのは、軍産複合体の先導と煽動で帝国日本の再興を悲願する安倍政権に庇護されているからなのだ。

▼安倍は「第一次内閣で失敗したことを、3年3ヵ月の民主党政権時代に非常に良く分析し学んで来た。その結論がメディアの操作と分断、それと言葉遣いです」と岸井氏は言う。

NHKの会長と経営委員の任命で露骨だが、政権支配の放送局に変質させようとの意図が明白なのだ。で、実際、萩井会長、百田尚樹・長谷川三千子両委員の3人に象徴される戦争肯定・免罪史観、聖戦史観・靖国史観がニュース報道と解説に徐々に浸透しつつあるようなのだ。そして新聞でいえば、『読売』と『産経』に肩入れし、『朝日』『毎日』『東京』を敵視する。

言葉遣いということでは、「特定秘密保護法」。実は何でも秘密に出来るのだが、また、そうしようとして企んでいるのだが、「特定秘密」と名付けることで、極々一部の極めて少数の国家機密に限定しているのだろうと思ひ込ませる。

「武器輸出三原則」を緩和するとして「武器」という言葉は使わず「防衛装備品」。改悪なのに「自民党憲法改正草案」。「国際協調」と言うが実質は「日米軍事同盟の強化」。言葉による騙しだ。

「安倍政権は、かつてなくメディア戦略・戦術を徹底的に考えている。ここは、我々としては油断していたところ。彼らの側から見て何が一番効果的な権力行使なのか、我々もきちっと分析していくことが必要だ」と岸井氏は提言する。

一橋大学大学院社会学研究科地球社会専攻客員准教授で、Our Planet-TV 代表の白石草（はじめ）氏が、ぼくがかつて提言した事を提起なさっている。

まあ『朝日』と『毎日』はライバル関係であっても、政権の異常な権力行使に対して横断的に協力して政権批判のキャンペーンを張る事をしてはどうか。非常事態的な統一行動でなくても、「あの記事はよかった」「あの取材ではこれこれの面の追究が弱かった」など、相互批判が出来るようにならないか。これだけ日本国憲法の理念を蹂躪する言説が大手を振って闊歩しているとき、いわば右翼連合に対抗する進歩的民主陣営のメディア統一戦線があってもいいのではないか。白石氏はここまでは言っていないのだが。

▼京都には、「市民のためのKBSをめざす実行委員会」も加わって、民放労連KBS労組とNHK京都放送局労組が放送した番組を相互批判し、市民の評価も交えて放送メディアの向上に資する機会「放送フォーラム」をもっている。全国に波及してほしいと念願しているのだが、民放労連で早急に、メディア民主主義統一戦線構築を論じていただけないものか。危機意識の共有が前提だけれども。

▼KBS労組から『放送レポート』を毎号贈っていただいていた。251号には、この労組推薦で番組審議会委員に就任した福島原発被災難民の西山祐子さんへのインタビュー記事もあり、臺宏士氏の「集团的自衛権とメディア」も必読だ。感謝している。 2014/11/10

---

## 御嶽山噴火 木曾がひとつになる時

佐藤 進

---

「紅葉・晴天・土曜の真昼時、あまりのタイミング！」「山の好きな、いい人ばかりが！」と、御嶽山噴火の犠牲者を皆が惜しんでやみません。国の貧しい火山防災体制を抜本的に正して、山と安心して付き合えるようにすることは、尊い犠牲に少しでも応える誠意だと思います。政府と県は、客が絶えた山麓地域（王滝村、木曾町）の「この冬をどう越すか、来年は？」という不安を少しでも早く解消し、自治体と住民による再建努力を力強く支えてほしいと思います。

さて御嶽山麓を離れていても、木曾全体がまるで火山灰に覆われたかのような風評被害を受けました。南木曾町の土砂災害による中央西線の運休が夏休みシーズンの客足を閉ざしてから間もありません。観光客がいつ戻ってくれるか、木曾中が心配しています。木曾ファンの私も心配です。木曾の今後に向けて外から一言するのをお許し下さい。

木曾各町村は、これまでも過疎化を憂えて、さまざまな対策をしてきました。しかし、今、災害の影響は過疎化をさらに進めかねません。この危機を打開するには、災害防止にとどまらず、地域再生を急ぐ必要がありますが、それには個別の努力だけでは不十分です。木曾谷の住民が町村の境を超えて力を補いあい、個々の魅力を連ね木曾全体の魅力として鮮明にアピールする時だと思えます。

例えば、木曾川上下流の交流は、名古屋等大都市住民の力を期待できる優れた事業ですが、さまざまな滞在プランを用意すれば、交流の幅を大きく広げることができます。有料の林業学習コースは考えられませんか。

地元の食生活を体験してもらい、廉価な健康回復滞在プランを作り、森林浴などとも結んで、ストレス・フリーの日々を過ごし、元気になって都会に帰ってもらいましょう。本年、木曾町に発酵食品振興条例が出来ました。さらにスローフード運動と連携して、木曾全体を「日本の発酵食品のふるさと」にする構想はいかが？

木曾路ウォーキングは参加者の評判上々ですが、町村を超えて十一宿を歩ける機会は限られています。ガイドを増やし、旧道の途切れた所をつなぐ等をして常時人が流れるようにしては？

音楽家と住民の交流として定着した木曾音楽祭の経験は、木曾全体を舞台にすればどの文化・スポーツ分野でもさまざまな応用が可能です。

地域のパワーは人のつながりから生まれます。木曾はひとつ。若い皆さんを軸に、つながり合いが谷間を貫いて、急速に広まることを期待します。

**\*注** 筆者の佐藤進氏は長野県松本市在住。銀行家としての長い在外経験を生かし、京都大学で留学生教育にたずさわるとともに、ボランティア団体「吉田日本語学習友の会」を創設。同会で今も続く「世界からの手紙」を発案、指導されました。現在は地域営農リーダー育成塾「松本新興塾」の塾長として活動されています。ここに掲載の文章は、御嶽山の噴火災害という事態に、氏の許諾を得て、同市で発行されている「市民タイムス」の連載コラム「時は今」2014年11月6日付から転載させていただきました。（編集部）